

一炊の夢

時間が過ぎるのは、本当に早いものです。

今年も、あっという間に半年が過ぎ、7月になってしまいました。この半年間、いったい何をしてきたのだろうと、反省する事しきりです。

7月2日は私の誕生日なのですが、最近は、毎年7月になると、積み重なった年齢の重さと共に、過ぎ去った年月の速さに唖然とするばかりです。特に60歳を過ぎてからというもの、ますますその感じが強くなっており、まるで坂を全速力で駆け下りているようです。

若い頃は、まだまだ沢山時間があると思っていました。しかし、今は、砂時計の砂がどんどん減っていくようで、残された時間に限りがあることを実感しています。救いなのは、残っている砂の量が分からない、という事でしょうか。

このように、貴重な日々の積み重ねなのに、過ぎてしまえばそれは一瞬です。

中国には「一炊の夢」という故事がありますが、これは、唐の盧生という青年が趙の都の邯鄲で呂翁という名の道士から枕を借りて人生50年の栄華の夢を見るのですが、覚めてみると、炊きかけの粟がまだ煮え切らないほどの短い時間であった（広辞苑から）、というもので、まさに「人間五十年、化天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり」です。これは幸若舞の一つ「敦盛」の一節で、織田信長が好んで歌ったといわれているものです。今川義元が尾張に攻め込んできた時、桶狭間の戦いを前にして、信長が清州城でこの「敦盛」を謡いながら舞うシーンは有名ですね。

過去を振り返れば、功成り名を遂げた人でも、「人生というものは、はかないものだ」という感傷から逃れることは、難しいようです。

何事も夢まぼろしと思ひ知る 身には憂いも喜びもなし

これは室町時代の8代将軍、足利義政の辞世と伝えられているものです。銀閣寺を建立し栄耀栄華を極めたはずの人生も、死を目前にしては誠に虚しいものに映ったようです。

位人身を極めたといえは関白太閤殿下も、その辞世は

露とおち露と消えにしわが身かな 難波のことも夢のまた夢

というものでした。

露は葉の上につく水滴ですが、太陽が昇ると、瞬く間に蒸発してしまいます。つまり、自分の人生が、朝露のように頼りなく、夢でも見ているようにはかないものだったということです。

人というものは誰しも、「自分の人生は満足すべきものだった」と感じて死にたいと思っているのではないのでしょうか。足利義政にしても太閤殿下にしても、それは同じだったはずですが、彼らは結局、自分の人生には満足しきれなかったようです。

人というものは、幾らお金持ちになっても、どれ程出世しても、それだけでは心の満足を得られないものだという事を、彼らは示してくれています。人としてどう生きるか、人生の目的をどう考えるかによって、その人の人生の最後の帳尻は変わってくるのだと思います。

天下統一に向けてひた走りに走っていた織田信長は、その目的を達成しようとする目前、明智光秀に背かれ本能寺で横死します。信長は死に臨んで、「敦盛」を謡い、舞ったといわれていますが、事実なら信長らしいと思います。しかし同時に、彼がもし生きながらえて天寿を全うしたなら、死に臨んで如何なる辞世を詠んだであろうかと、興味は尽きません。(塾頭 吉田 洋一)